圖解

量地指南前編

上

洋学文庫
文庫8
C 299
1

量地指南序

夫生兩儀清濁既分覆者為天偃者為地其間相太無數大塊也往古聖人仰俯觀察而垂其象能使天下後世無一

中山分家藏書之印

41 7696

物不得其所所以振起其英靈而人本乎天性莫不因其已知之理而益窮之以求至乎其極者也友人訥言携南勢源昌弘著述三巻以置

几上余繙視則輿地規矩術之圖說名曰量地指南能使　國字啓蒙便同志之意至為精密盍請序之雖余未嘗學即凡天下之物而窮其

理格其物之階梯而有遐棄焉乎哉占小善者率以録名一藝者無不庸況於勞者乎立霽聚螢刮垢磨光惟以此一盤面措坤軸於夷險一

平之安是与離婁督繩公輸削墨而不洞者相似也庶幾矣一善其工用二厚於故舊三欲成人之名々微遂落毫于其端如此

享保壬子冬至後二日

貝南穂重英識

享保十七年壬子仲冬壽梓之

量地指南

序例

一　夫量地術の要ハ書契にはじまる。三代のいにしへ伏羲氏の一畫線画し始めより起りし。小後世に至て道藝へ官失し。小学の法類廃して僅に此術も方術にて我邦紅毛の國より入しものや。独り紅毛の人ハ常に商賈を事として萬國を来往し、西洋中に於て國々の交通に海路によって星象に驗し地理に考るにや術簡ハしらしめんを注して、これ渡海にて測とあらず。みつからハ今此術者古和に流布する事もなしと我邦諸家の人に傳りするのいはれ業にまもるよりいへども。これ本源を捨てきたん。中華の正法たる至の遺術なり。

術の忘却事ハこれあらん。世人地理を不撰みだりに
阿蘭陀の名儀なりとして。器ハ斗に奥を云ふ術の名に
怪しむ。学者博く及ぶ事なし。

一 偉なるかな量地術の徳たる事や。不可知ハ一大の霄に
高きを測り。不至して地の厚く広きを察し。不入して
海の深く遠きを知る。彼山谷河原野丘陵城営
宮室の類ハ高低遠近を量りつゝ明らかにす。而ハ
陰も掌上の物を指すがごとし。或ハ日月の運行を測て
暦算を定む。或ハ渡海に船路と風の方角を図し。或ハ
敵陣の遠近を量りて要害を知る。或ハ城の高低を
知りて水道を鑿し。のぼりハ落しに就てハ不撰ふ
事なし。この類の事の八量地術によく遠きを指す。

一 これらの術の名ハ至極なりとして惟を事へ。誠に
量法始術にあらずや。
一 世に量地の術に数ありといへども。大旨ハ数
五様あり。一つに云 盤鍼術。二つに云 渾發術。
四つに云 算数術。五つに云 機械術是なり。しかも数学
優劣ありて不論。学者達して学ぶべし。所謂盤鍼術ハ
甚だ簡なる方にして是が中にあり。所謂量盤術 渾發
術ハ新たに国の秘法にして経捷なり。所謂算数術ハ
数を用ひての略遂なり。所謂迂遠なり。所謂機械術ハ工巧
木家の不為にして是を乙るなり。皆その奥をいふてハ
一致なる。とても出でしかし其術ま是一理
あり。この法の事あり。学者一術を好みて

一　この術を学ばんとせば。初に此術の非なることを知りて参攷の為に。従来の諸法諸説をもて撿察すべし

一　此一編ハ和漢紅毛伝来の術を輯めし。中華西洋の法術蘊奥として選び。見るところを退け家々に秘するところを旨とし。世に用ゆるところを先とし。秘術に流るを旁捜して此に新正し。假に名づけて量地指南と号して。前後編五巻題問二十有余条。前の三巻ハ量盤術の入分作法記。後の二巻ハ渾発術。整織術（整針術とハ世に所謂見盤術。張糸術とハ盤面の格に扱ふなり）。且算勘術の二法を述ぶ。題問二十有ハ遺漏を補ハんと。機器術の諸法を載せ。学者此全編を熟読してのち。量地の法やいかにしてなるべし

一　およそ此書を編しるゝ。大略李広源の諸術で

数に備へ覧に便ならしむ。其中にも間々〓度不必要なる事あるものハ。易術を前にして雑術を後にまはしたれバ。あるひハ南の前術に載するをもて此法。ゆゑに後術に出づる事あるものハ。其学習需要なり。もあんハて躰をハかりなり。抑して初学を導くの源なりなりして。不思議に数伝述べたるのなり。自然に熟説を以て著せる事あり。覧者これを咎めて一途に不偏なの修飾をのぞき置るのみなりし

一　初学の士此書を学習するに。其首より巻尾にいたるまで。編目に随ひて逐一に其術を研究をとぐ終する事なかれ。又至る所なし。唯其中前後の差略に拘らず。其理の窮め其旨を知りて。其術

の全しがたきを済とし。一向に新奇を専にし。通と
うきね精を得られし。漸積の功を励へし。不撓して
たゞちに円理よりて極めむと欲をはかるは労
して功なきものなるべし
一 近来世上に称せる法の編目は撰ぞまれはなき
愚の胸襟たるの説なり。故に今こゝに円理を悉しくよ
是を致すべし。新たに之を標目と定む。他の正法を示すによ
由ては世に是を粗一段なるの方ならし。志あれば則古法を
蔑にすることなかれ。我執あるに似たりといへども。
名え実の賞なり。何ぞ不易を用ふべき哉。理己
ふ頗ることとともに人と得てして道に戻る
ると壊るゝ今やむ事を示しつゝあり。

一 法術の中に円理に志すべきハ。是術還て惑ひを生じ
略にしてはまれに之理に於て速不解なるものあり。然るに
此等の術ハ之を円理と揚て之を窮めんとするも
問題し。識者ハ除かる。円理に於て論ずべし。算術ハ初心
略算によるといへども其の日の数に拠て深き
に帰りて円理に従ふべし。不揃にして急に始めよ
隷しむときハ恐らくハ劣るべからずや
一 されば量地の器械。五術針術量盤術揮発術算数術
名別割ありて。器品新相備にこれを彙類とし分て器し。
或ハ渾儀と称して量器を用ひ式ハ交叉と編して
引きとかへこれ割作つ究めかくしこれを不相数手をとりて
算ふ。学ぶ者集て是をもとめ是を辨むしきハ用を備さ

為ればいづれも自他の損を補ふがため。今まで近国の
割を省き給へる者の異を察へて得べし。此編の初章に
図しるし給へば。五術の算式くはしく一條ごとに記しおきたれば今まで其術の初に誤りたり
既に見えたり。此術を熟しなば足りぬべし。強ゐて
学ぶは其地を需むるに益削し

一　近世の毛図伝来の量地者流には秘訣を称ふと述ぶ
ある人あるは奥義ありと号し或は其伎を実にし或は
其器を制して世を惑し人を誑す。すべて量地の
作法千差万別事業多くあるひは一ツ所に分ちども
其の蘊奥にいたりては一ツ理より出れども其術は
なれり。其器械の損益によれり。すべし近頃
の得失あまたあれども。よし此書の旨を味ふべし　此

法の理を通暁せば。大概諸家の奇術妙法と称する
ものは口授を不経しとも得べし。諸術のその
浮説にまじはる事なかれ

一　量地の作法は小理の事と二様の差別あり。理は図面にて
読して日に伸すべし。事は稽古をして時に
よろしく習ふべし。すべて量地の業は一事一術と
いへど口授によるものにあらず宜しく修むべし
人を云ふ世人の識得る所なり。然るに予今諸家の蘊識
萬く世人の識ゐる所なり。孤陋寡聞を不顧。諸家の秘訣を集め
とふ所。孤陋寡聞を不顧。僻論を発して述
と聞し伝ふる諸説を参て微妙を解し。其
まで今法を学ぶの業輩に元来あらず。秘訣を授くるは
失考異説を挙げて。他の好む所へ事を書より

こゝに悔なきにしもあらざれども諸友の需むる所
志すまゝなりしかば再三固辞すれども撰用に従ひ人の
為に指南の糊塗を述るのみ

享保十五年庚戌春三月上幹操筆於
東都南芝之神武館村井大輔昌弘

量地指南巻之一

南勢 處士 村井昌弘編述

量盤術始計

先量作法の事

先量とハすなハち本術ハ勢ざれ以前に。空眼（俗にこれを目げのりと云）をもつて。本座より目的までの遠程ハいくばくほどしと量て。或ハ幾里幾町或ハ幾十幾間と其大槩ハ豫じめ知るを云。かくのごとくしつて。遠近廣狹高低淺深ともに。目的までの法程を先量て。然うしてのち本術を勤るときハ。ことを差異出來る事なし。此法ハ不用して譲に本術を為ときハ。或ハ十町なるを一町と心得違へ。或ハ十里なるを一里とするを誤る類ひにいたる。むかしよりまゝ甚し。さ心得ちがへなるより。あやまりハ有ほどさまざまなれども。是ら先量の便利莫太なる事なる。初學の人に知らしめん為の事なり。

蓋量地の術に此法ある事。そもそも筭数の學に。位を見るといふ事あるがごとし。筭學に位を見る事不能ときハ。乗除作法のごとくなして。其術大成すといへども。幾千萬を乗ずるまでハ幾億兆の増益する事をしらず。幾百千に除するまでハ幾毫釐毫と減少する事をしらず。量地の術もまた此先量の作法をしらざれバ。数のごとくして本術大成すといへども。幾里町幾間尺と定まる事かたし。よく察すべし。故に此先量れ法は柱礎として本術を勤る事。いにしへよりの要教なり。開除の間数も是に本づきて定む。○開除の間数を定る作法。下の章にあらはす。又火急なる場所なくハ本術を勤る暇なき故に。此法のミをもちゆる。間町を量る事ゆく有事あれバ。尤もはじめにかふさるべきなり。さるをそ先量の作法ハ。常々道路往来の歩行にも遠近廣狭を試ミ。山谷遊覧の眺望にも高低浅深を察し。平生に心を用ひ不断に眼を属るときハ。自然に其事に熟達するものなり。又此法に視観察といふならひあり。先量初中後の心ばへをいふ。抑此三字ハ。經典に出て言やさしといへども。

今此法に假用するところをのべていはゞ。視とハ兎角の思慮なくてミるハ。即座の目量をもて知るを云。兎角の思慮なきとハ。思案分別の私意を用ひざるを云。即座の目量とハ。上面一遍の目づもりをいふにあらず。知るを云。故に此法容易の事にあらずといへども。無我をもつてするの故に。品により事によりて。觀察の二法にも超る便利あり。常々執行の心もち尤太切なるべし。觀とハ此眼の由来を探り。彼眼の按量を詳にして知るを云。此眼の由来とハ。目的本座ホの由て来る所以を探るを云。彼眼の按量を詳にするとハ。他眼の遠近に此地の法程を按量るを云。故に此法ハ視法よりも其こゝろざしやゝぬかりと知るべきなり。察とハ地利の善悪を考へ。天文の是非を察し。深く心を附て知るを云。地利とハ。高深廣遠険難平易ホなり。天文とハ。晴天陰雲雨後雪日ホなり。故に此法ハ視観の二法に超て甚だ心ぬかりし。よく此察の法を通暁するときハ。遠近廣狭高低浅深。本術を不待して大畧あらかじめ知るべし。学者はげまざらんや。されバこそ此三法ハ先量の樞要なり。能こゝにあきらかならざるときハ。毎術其的中

空眼之圖

なかるべし。若まる本術にてもまゝ差異ある事ありと又ども此法に不叔ば。規矩となして糺正すべきことのなし。量地の學に志ざらんものは。造次にも顛沛にも此作法をさることなかるべし

精眼作法の事

精眼とは目的を定ることを開地を求ることを。又　見込見通再見見返ことを（目的を定め。開地を求る作法。まる見込。見通。再見見返ぶの事。下章にあらはす）毎事眼力を精ましくして見違のある事なからむ事を云。是又先量の一方なり。或は廣原茂林或は高山窄道或は海面河上或は村里田畑など地によりて又期によりて見誤る事あり。且清明の日。陰雲の日。炎暑の日。嚴寒の日。又ハ雨後。雪日。春夏秋冬など。時により日によりて見違ある事あり。其外日を前にし。

日を後にし風に向ひ。風に背き或は真向。斜向直上。直下をのぞく心得多し。いはゞ其ならひ切用なれども。人々の眼力一定ならざれば故に。一般の教諭を施しがたし。ひとへに平生に空眼を試し習ひ。其己が得たる所をよく目馴る事肝要なるべし（熟じてかくのごとき作法。筆端に述がたき事まゝあり。爰に志深からん人は面授すべし）

精眼之圖

目的を定る作法の事

目的とは本座より今求る所の目印を云（目的の図下に記す）是遠近廣狭を量ることを。高低浅深を知ることを第一とする作法なり。故に此

目的を定る事は。樹竹巌石堂社丘垤何にかぎらず。彼所の正面に在てはなはだしく目だてる物を吉とす。勿論本座（本座の事下に委し）より見込（見込の法下に出す）のよろしきが専要とすべし。兼てまた開地（開地の事下に委し）にいたりて見返（見返の法下に出す）を為ときは障りなく彼目的見返し安からん事をよく遠慮すべし。もし開地にて目的を見返さる事疑しき時は。かならず其術に差異出来るものなり。或はまた廣原平野田畑海濱のごときは曠遠の場所にて。其近邊に目だてる物なくして目的のしかと定めがたきときは。空の目的（空の目的といふ事）いたつて宜しきを用ゆべし

本座を選ぶ作法の事

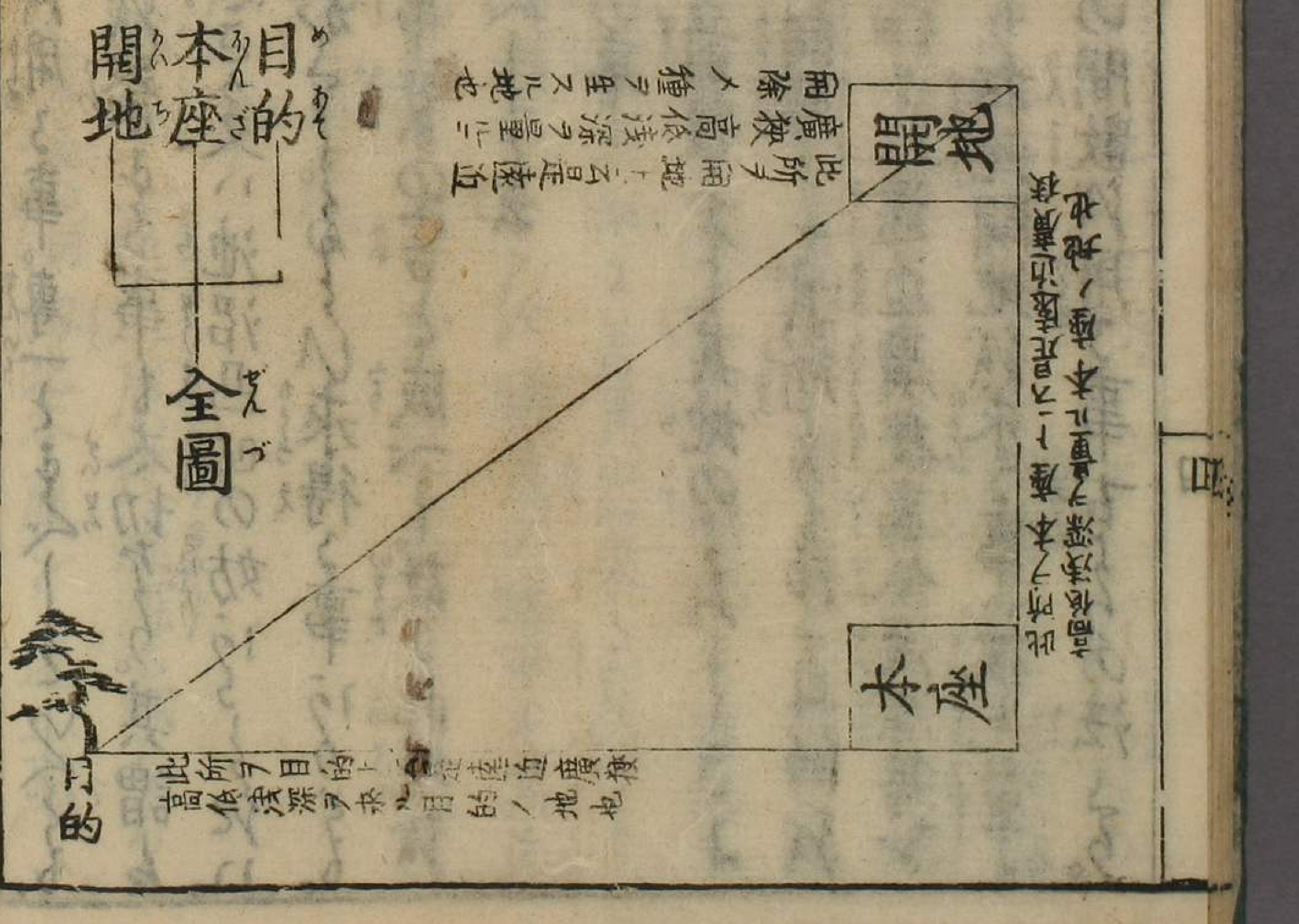
本座とは其所より目的を眺視て遠近廣狭淺深などをはかり知らんと欲する場所を云。（本座の図下に画を）扨此本座を選ぶ事は。

まづ目的の見えわたる所を用る事。専一とすべしといへども。ゆゑ其所より開除の善悪を察する事も太切なり。其謂は開地の方に除畾甚いだ少きか。又は池沼凸凹の妨げあるときは。心の侭に開地を求る事成がたし。しかして求得る事ありとも。其法順路ならざれときは。事業の害と成べし。故に此境を能く躰認してのち。選ぶべしと云

開地を求る作法の事

開地とは本座の左右なりとも前後なりとも。其地のよろしきによりてひらく。間數をはかりて開除して其所よりも亦目的を眺視てよき場所をいふ。（開地の図下に画を）これ遠近廣狭高低淺深等を量知るべき本元の種子なり。扨此開地を求る事は。彼先量里にあるところ町間の三十分一の間數を用る事。古よりの法なり。

ゑとへバ本座より目的まで。先量
かく三町とたるをさらバ六間開く
べし。又一町半とたらりさらバ三間
除くべし。是三十分一のつもりなり
然ども少しく有餘不足あり
とても深害有といへども其地の
廣狹難易によりて。止事を
不得ときハ免角宜しきに
あつかふべし。まし開地を
求むる事くりかへしにして。
見返に妨障ある。又ハ間數
古法三十分一よりも甚しく
少さる。多きハ何ほどおほくも害となる事なし。或ハ
開印（開印の事下に記す）或ハ殘印（殘印の事下に



記す）等によりて見分がたき時ハ。事術の妨礙となるものなり。よく
其利害得失を察すべし。且また開除の作法大躰本座の右方
狹ときハ左方へ開。左方逼ときハ右方へ除。後地・迫ときハ
前地へ進み。前地闊ときハ後地へ退く。或ハ前後左右嶮難
狹隘なるときハ。前後左右の斜開をも用ゆと知べし。猶其外
種々の作法あるハさき事。往々其術の下に記すべし。勤て
工夫勘辨すべし

量盤居やうの事

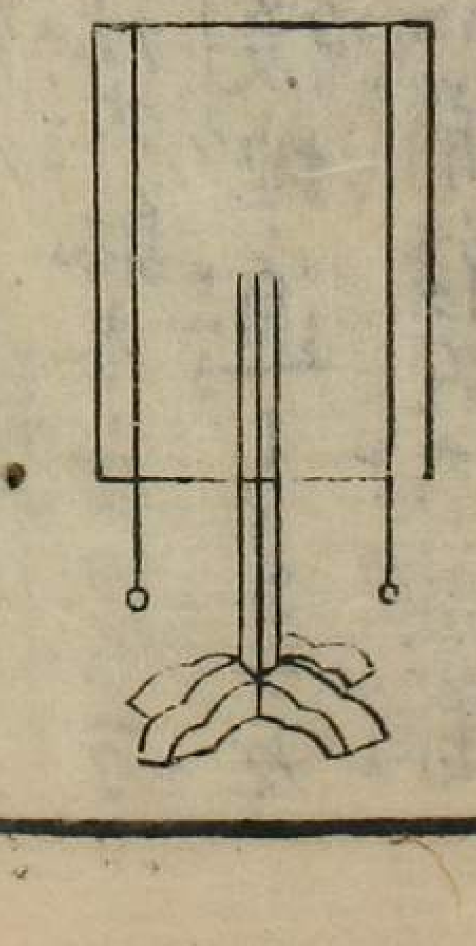
量盤を居る事山陸二様の差別あり。所謂陸地にて盤を
居る作法ハ連々上章にいふがごとく。本座目的の開地なる
ゆへ極て然ししてのち本座に臨み量盤を目的の方へ堅立に
なして（盤南を彼とし。盤北を此とし。盤東を左とし。盤西を右として）方正に居直拵其臺の下に楔を

施し水平（盤上まこハ基上ふ水汰盛をのろり）垂針（是ハ盤上ふ載て。針口を合せなり其器下ふ図を）釣玉（盤の四隅ゟ細糸をさけて。錘玉を降るろり。其器下ふ図を）等の平正器の姿ふ隨ふべし。（平正の器。三物一同ふ用へしといふハ。一物を用ひても平正極るなり）彼基臺の下なる楔を縮弛して平正ぉ定むる。（なり。ゑし盤を居べき場來不平なるハ。其地形をよくおろし。平面になして）右のおもむきハ盤を居へし傍き眈視の數余多ゝるゟ。

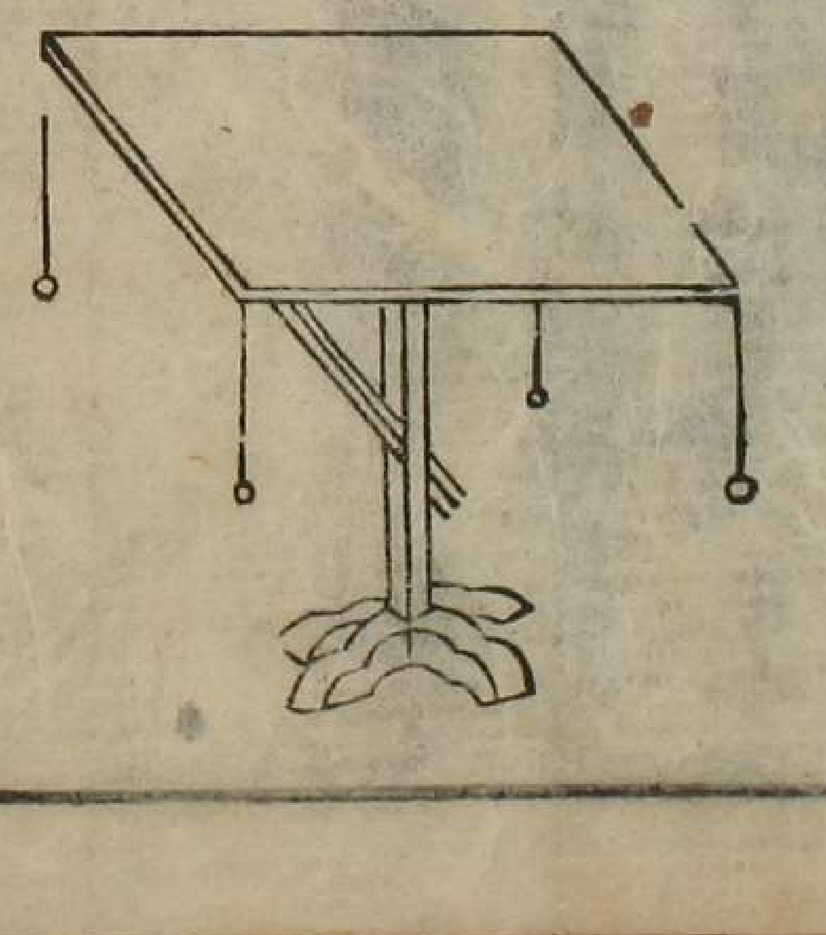
或ハ目的ハ近く開地ハ遠きとき等ハ盤ぉ横ふ居るなり。（盤を居る法大方竪面を用ゆといへども。かくのごときのときハ。横面なることに用るなり其法連々下ニ記せ）

又目的の上下ハ。盤面ゆく上下をなし開地上一、ハ定規ゆて上下ぉなるろり。

立盤之圖



平盤之圖

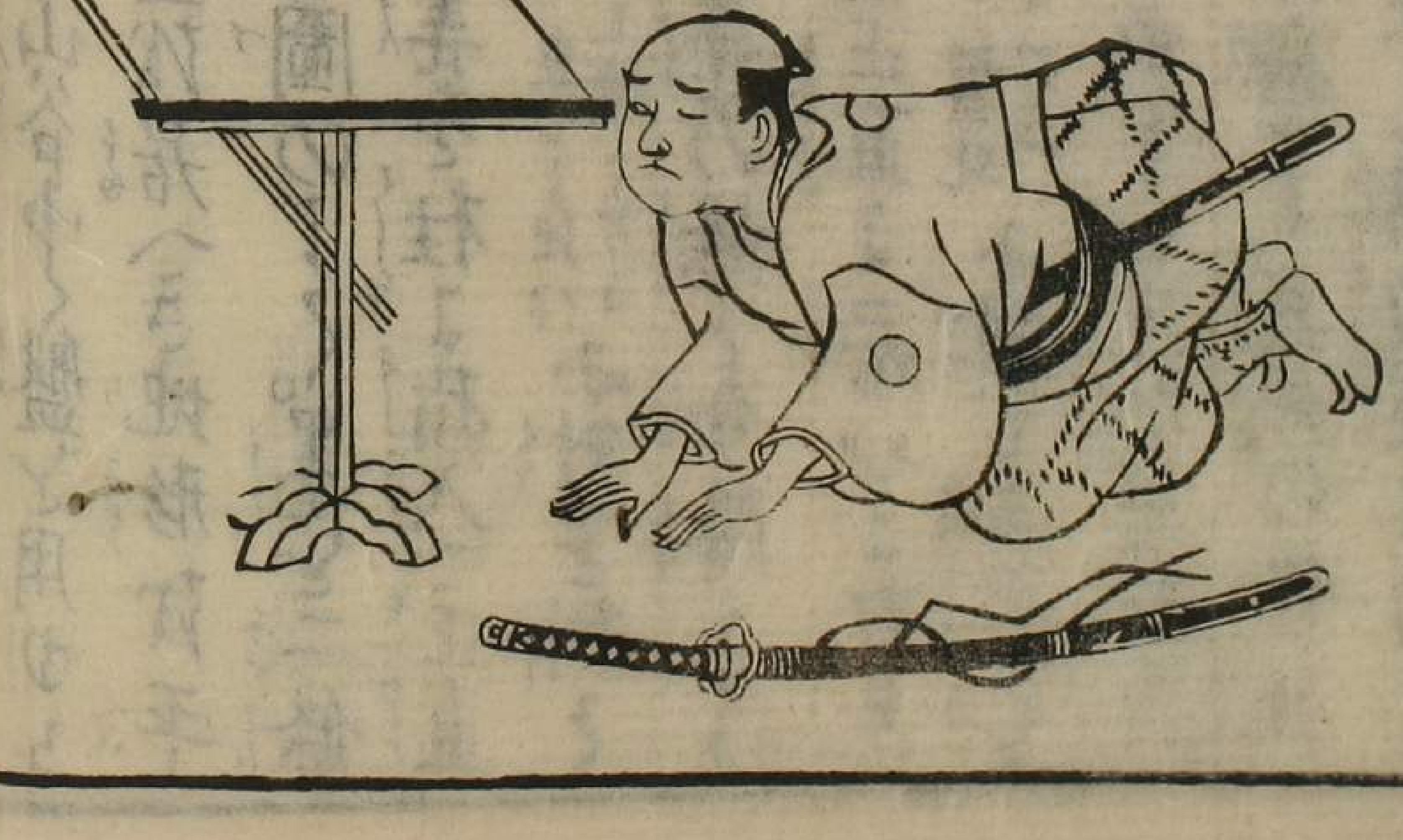


各其法式くりしく別巻ふきるるを所謂山谷ゆく盤を用ゆる作法ふ云まげ右ふまをいふがごとく。其盤ぉ居へき地形ぉ平面ふ折なし。豫じめ盤裏の左右竪ふ圖のごとく。墨を二條隨分不邪ゆるふ引渡し。扨盤裏の柄笄を柱ふ指入て正直ふおし立然りして盤北の木口（盤ぉたし立るときハ。盤北の木口上端となる）ふ針を刺て釣玉ぉさげ。兼て盤裏ふ設け置る墨乃條と今降るる糸の條と一致ふなるべし。即これまく盤正直ふ居いるなり。是を釣玉の法と云。又降糸の法とも号く。又垂針を盤縁（盤縁とハ盤北の木口をいふ）ふ載て其針口を眈合せ正直ふ定るをよし。又水平を用ゆるを可なり。かくれごくするときハ。盤の正直立ところふ極する。其外の作法惣じて平陸量盤乃居やうふ准知すべし。猶後章にくハしくきるるを照し考べし

眈視并作法の事

眈視とハ。眼力をもつて見込見通再見見返ホの目當れ印を見定るを云。其作法身体の居やう眼中のそれぞれに各ならひあり。まづ盤を其座（其座とハ本座。開地小開田糸開。何れにても其居所を云）ニ居て。定規を盤面ニ載せ。定規の本端と末端と彼目的の印と何方ニても一條ニ見ゆべし。體を平直ニゐて臀をすへ逡巡し。跪坐して左右の手ハ杖一眼をもつて眈視なり。勿論右眼を用ゆべし。去ながら

眈視之圖



左眼利なるものハ。左を用ゆるも害なかるべし。眼甚定規ニ近きときハ目的散て定かならず。眼甚盤面ニ遠きときハ眈視乱て極まらず。偏其中正を得む事をおもふべし。顔面てらされぬやうにすべし。（てらすとハ面の仰くを云　ふするとハ面の俯くを云）鳥銃を眈る心持ニて見るべきよし。但古法ニも眈視やうハなかりし有事を不謂とあつかる人々五躯ニ備りたる規矩あり。其己が稟得たる規矩をとりて見るべしといへり。唯其至要ハ坐作進退の間ニも。怠らざれバ精練なるべし馴致することなりと云

見込并求程の事

見込とハ品々作法のごとくして後。本座ニ盤を居。（盤の居やう前ニくはしくあらはせり）盤端ニ定規を載せて（右端ニても左端ニても術ハ同し）其所より正當ニ目的を眈視を云。（見込やうの作法ハ前章ニくはしく記せり）遠廣を量るにも高深を知るにも。

毎術其法同然なり。又盤面大成（盤面大成とは。見込見通見返の術。尽くおわりて。盤面に三四五の形現はるゝを云）のときは此見込の條が四とゝ股とをなげく。すなはち即求程乃縮なり（求程とは。遠近廣狭高低浅深の術とあり。其求る程を云。即見込大成となる時の号なり）

見通并開除の事

見通とは。本座にて作法のごとくして。目的が眈視なれば盤がすこしも不揺して其侭に居置。盤の此端に（かゝらずとも。此端に限るにはあらず。盤の中へかゝるも。見通の事もあるべし）定規が載せて。其所より横當に開地を眈視と云。（見ることやうの事前章にくはし）遠廣を量ることと高深を知ることと毎術其作法同然なり。又盤面大成の時は（盤面大成の事前章にくはし）此見通の條を三ツと鈎ともなげく。すなはち即開除の縮なり（開除とは遠近廣狭高深の術とあり。其本座より開地までの間の間数を云。即見通大成しる時の号なり）

再見の事

再見とは本座にて見込見通の術が勤てのち。開地に移り。作法のごとくして盤が方正に居。盤の此端に定規が載て其所よりも猶また見通の作法のごとく横當に本座の残印が眈視を云。（此術。見通の術を再びする故に再見と云。此法なくば開地にて盤を方正に居る為の事にして枢要の術なり）尤此法見込見通見返の三法に並称すといへども。假令の事にして實用にはあらず。然ども是も亦毎術廃すべき事ならざれバ。爰にしるし記と其優劣は勤て知るべし

見返并假借の事

見返とは。本座にて見込見通の術が勤てのち。開地に移り。即本座が再見しある盤が。すこしも不揺して其侭に居置。盤面に定規が載せて。其所よりも猶また。斜に目的を眈視を云（見ることやうの事前章にくはし）遠廣を量ることと高深を知るまでを毎術其作法

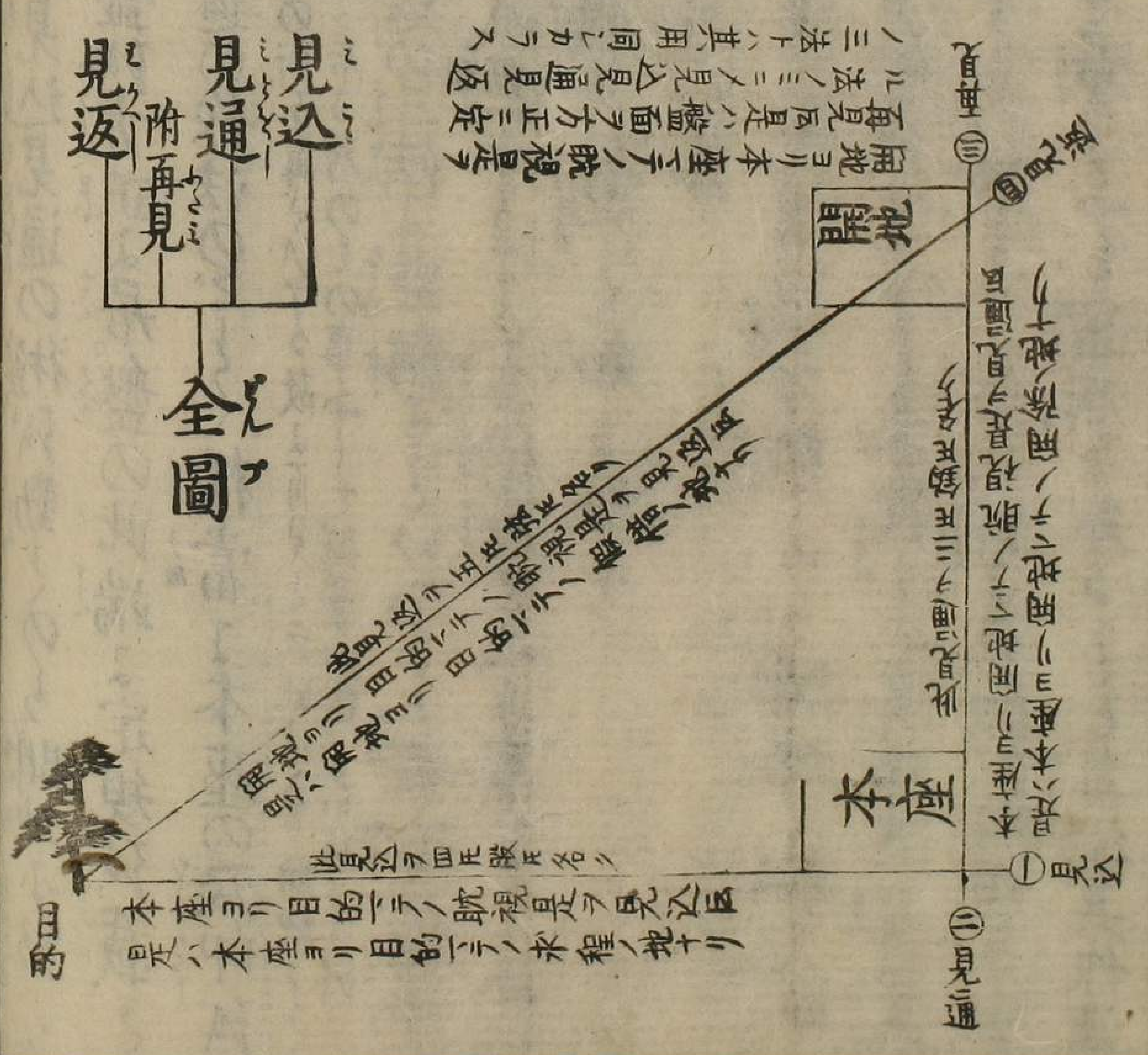
同然なり。まつ盤面大成前章にくはし

盤面大成の事

時ハ。此見返の墨を五ともに弦とを号く是即假借の縮なり

假借とハ。遠近廣狭浅深の術よりのよ。假に借用ひて其術を成為ましむるをいふ。即日ハ返大成しゐるときの号なり

右にのぶるごとく。一番に見込二番に見通三番に再見四番に見返次第を追て動かしときハ。下に図するごとく盤面大成して量地術の全体備ハる。是をのくくるときハ。千万里といへども立所に其道程を知るべし



四品の標の事

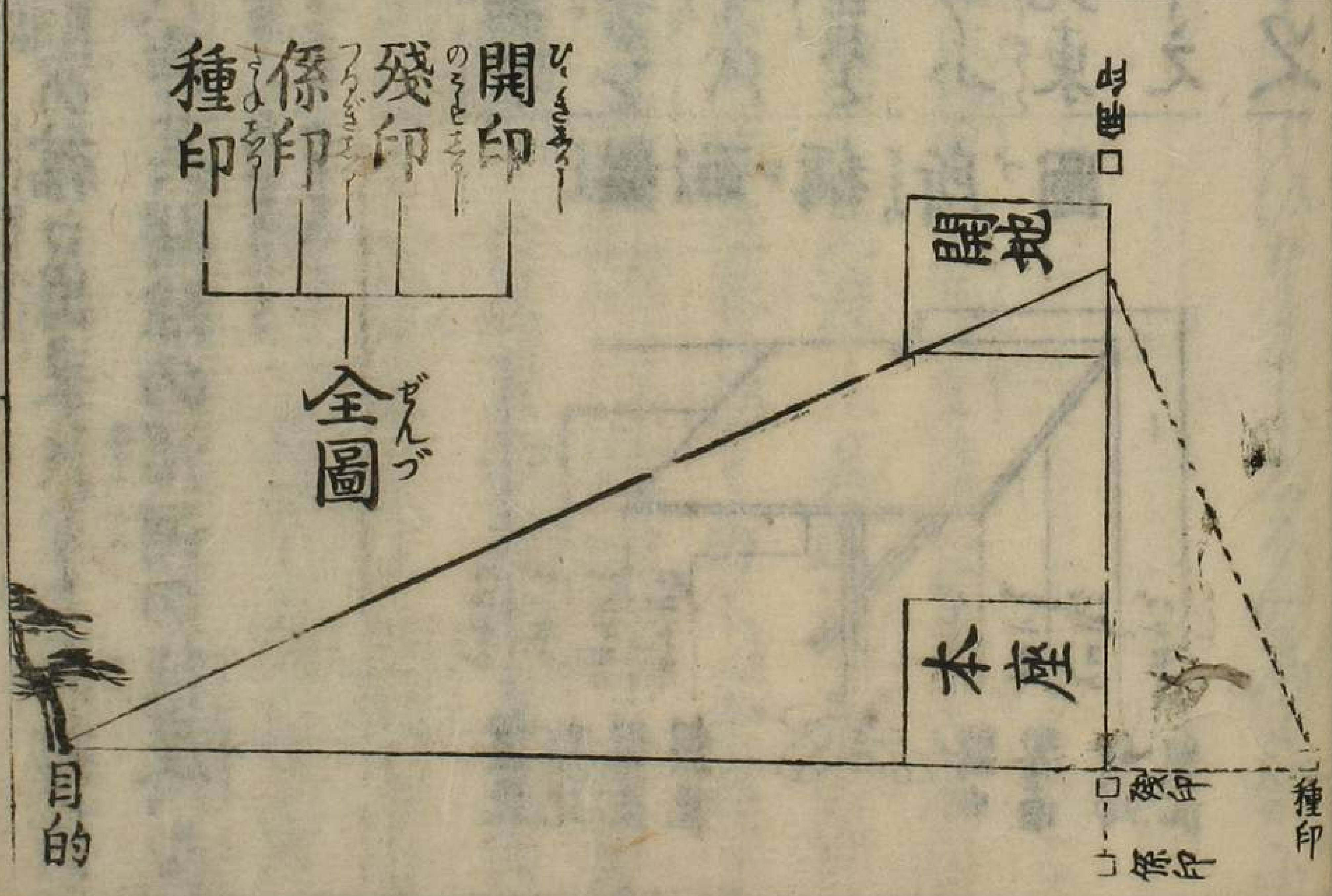
四品の印とハ。開印残印係印種印の四種是なり其作法各異別あり もとく印を立る事ハ。本座開地ハいふに及ばず。或ハ種子場。或ハ小開場ホ。いづれにても。其座を迂るを要。其ハ的を見る要ホハ。毎要いくら小是を立べし。又開印残印の二品ハ毎術不用して不叶印なり。種印係印の二品ハ土地のかまりよりて時期のやうしきまりてとらずべきなり

開印 見通の印ともいふ とハ。本座に盤を居目的を見込てのち。開地を求るとき其よろしき場に此印を立て。本座より是を目的によく作法のごとく 作法とハ。盤を平正に居。定規をもつて見こむを云 見通し。開地を定る印なり。所謂残印 本座の印ともいふ とハ。本座ゆく見込見通の作法畢りてのち。盤の隅に此印を残し置然して開地に移り彼場所より此印を目當として作法のごとく 作法ハ右に同じ 再見し。盤乃平正を極る印なり。此二品の標ハ毎例かならず用べきなり。所謂係印とハ本座と開地との間に沼ヶ河ヶありて。開地への

往反不自由なるところに。開印を不用。本座に残印と此係印と二本を係印ハ残印より五間も十間も除りて立るが吉正當に立て係印と不用ときハ。開印を立べき事勿論なり。係印を用るときハ。開印不立して害なし。故に開除の間に沼河などありて。往来せずしき為に係印を用て開印を不立事有本座の残印より此係印を見通し爰にてハ係印を開印の代りに用るところなり本座の盤乃平正を極め。然して開地に移り彼所より此二本の印残印係印を一條に眺視て正當に再見し盤を居る為の印なり。残印と一本立る事ハ尋常の例なり。然ども開除の間に沼河ありて。往来不自由なる時ハ。開印立がたき故に再見すべき目印なし。爰をもつて残印と係印と二本を正當に立て。本座に残し。是を正當にとりて再見するなり。是開地へ往来せずして其條理すこしも違ふ事なき良法なり此係印ハ開地へ往來不自由なる時のうれひをかぞへれバ毎術用ても利多かるべし。

所謂種印とハ。本座と開地との間に沼河が有て。開除の町間いかにしても量がたき時にこれを量るに用ゆ。其法本座より開地までの遠程を先量し。其三分が一の間數を積りて。

前へ成とも後へなりとも勝手よろしき方へ間數を定めゆくべしたとへバ本座より開地までとをくべき所まづ大槩三十間なりと先量したらバ即其ハ三分が一の十間をもつて。種の間数と定るなり。猶後委くあり種印を立。本目的を見込るごとくに。本座より是を正當に眺視てまづ係理を定置。然してのち。開地にいたり。場を選びて盤を居。本座の残印と係印とを一條に眺視て。再見の條理をよく定め。扨其ハ盤かくて此種印をとと見返て倶に

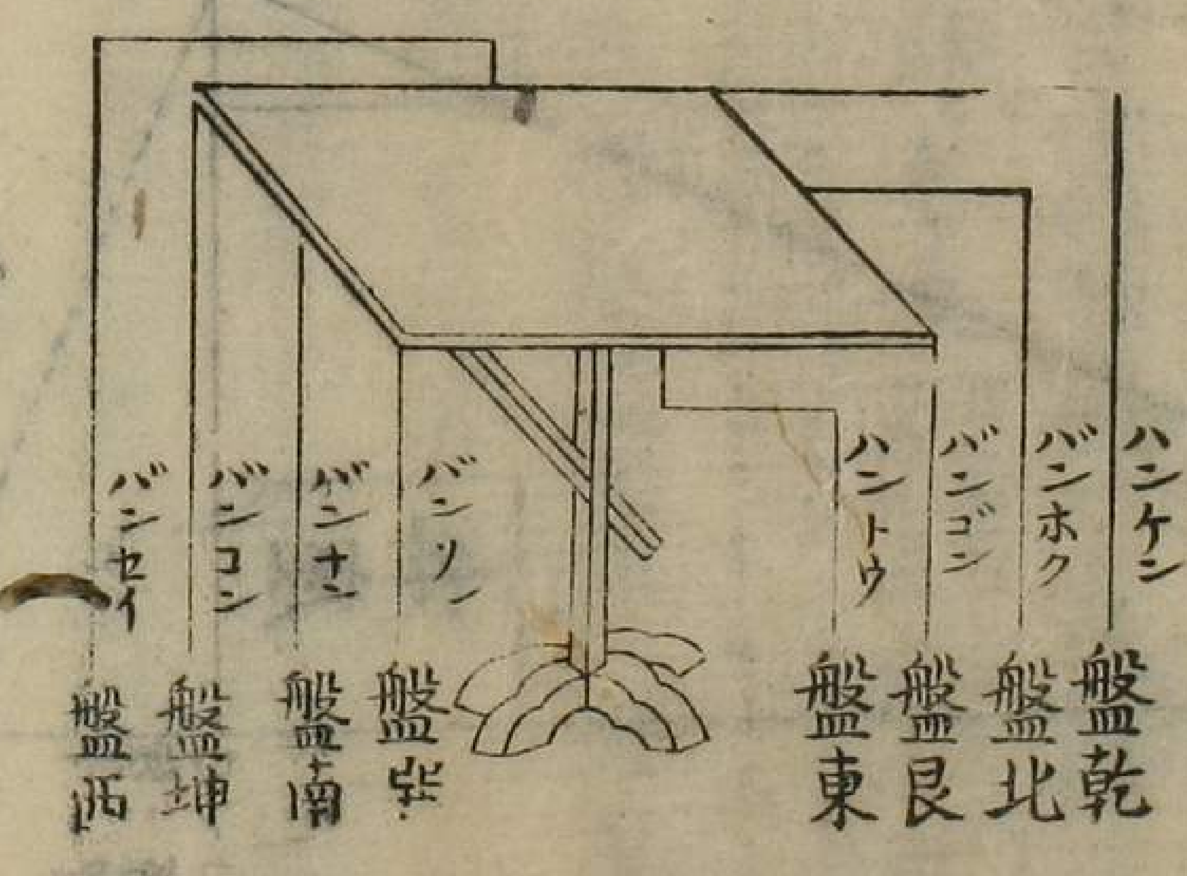


盤面に墨を引渡すときは。種間の縮口出来るなり。此縮を
よりて開除の縮を量るときは。即其開除の沼河の徑度は
知るゝなり（爰にハ其大法を述ぶ。其審なる事。後巻にあるを考へ合すべし）

盤面稱所の事

量盤の上面四方四隅八箇の稱所
あり。所謂左方を盤東といふ右方を
盤西といふ。彼方を盤南と云此方を
盤北といふ東南の隅を盤巽と
いふ。南西の隅を盤坤といふ
西北の隅を盤乾といふ北東
の隅を盤艮といふ是いにしへ
より稱し来る所にありしといへ

盤面稱所圖



ども。初學のやからは其所を指にまよひなからしめん為に新に
其稱所をしるす學者知るべし

量盤始終作法の事

往々右に述るがごとく。空眼視観察等の先量法をなして。本座
より目的までの里町反間を大槩に見渡し。其遠近に随ひて
三十分一の開除を假に定置品々作法整ひてのち。本座に
量盤を方正に居て盤面の竪端（右関のところハ左方の端 左関のところハ右方の端）に定規
を載せ（定規ハ見込見通再見見返ホ毎法毎般盤上に置て見ることの矩とする）目的を眈視なり。是を
見込と云。次に假に定置する開地まで竿をもて間數をとら
せて。（此間数古法三十分一を用也。大槩是に准して間数を定むべし。これすなハち量知の種なり）其所に開印を
立させ。（此印もまづ假に立ること然して家初に居て目的を見込する盤をすこしも不猶して置なり）盤乃此の嵩
に定規を載て彼印（開印と云）を眈視なり。是を見通と云。尤彼印

定規と正當ニ合ときハよろし。もし不合ときハ。幾たびも彼印にて進退成しめ（進退の仕やう。是も正當を専一にすべし。ゆるやかに正當をとるべし。左右ある時ハ乗求の間数ニ差異ありてなし）定規と正當ニなるべし。よく正當ニ成る時ニ。盤の隅ニ残印を立させて開地へ遷れなり。扨開地よりて開印へ盤の隅ハ假ニ合せ。初のごとく盤の此端ニ定規を載て。此所より本座の残印へ眈視なり。是ハ再見と云。尤其印（残印をいふ）盤の此端の定規と均く合ときハ。宜若不合ときハ。幾度も盤ハ居直して残印と定規と正當ニなるべし。扨盤よく居ゑらバ其時まで。定規を斜ニ盤上ニ置て本目的へ眈視なり。是ハ見返と云。尤目的と定規の本と末と三所一條ニ成やうニ。幾たびも定規を動して目的ニ合すべし。其定規よく目的ニ合ふときハ。即定規ニ随ひて盤面ニ墨を引なり。

見込見通再見の三法ハ。盤の端と定規と一致なるが故ニ。墨を引て。さりて疆とするニ及ばず。くれぐれ見返の一法のみハ盤中ニ斜なるがゆへニ。墨ハ引てさりて印とするなり。扨墨の引やうハ。工匠のやりの曲尺をあて。杣木ニ斜するごとく。悠筆をあてて定規ニそうて。ゆるく引なり。されバ渾發をゆるく界引仕る。めぐらし形のごとく見込見通見返の法悉くしとくおふ時ハ。盤面大成して三四五の形ありて。微妙其中ニ合蓄せりと。べて盤面ニ模し現しある形ハ。目的本座開地の形をすとしを不変して大を小ニ引縮する圖なりと知べし

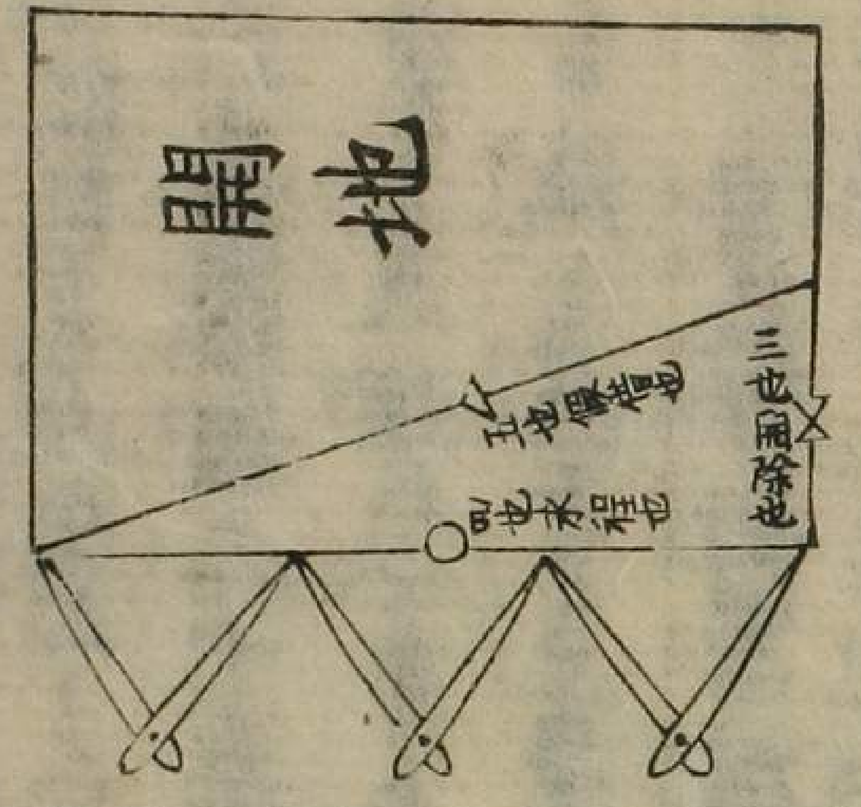
渾發用やうの事

上章ニいふがごとく。量盤ニ據て見込見通見返の三法悉くとなふ時ハ。盤面大成して毎術下ニ圖するごとく鈎股弦三四五の形（鈎股弦とて。三四五といふ。一事別名なり。とのづら是を二法とおなじく。ほどなふべけれ。猶委しくハ別巻ニ記を）あらハる。或ハ左右開或ハ正開或ハ斜開の別によりて。ずいぶん其形異となれども。大躰毎術三四五の形。鈎股弦のこころを。離る事なし其三を（三とハ右にいふがごとく盤の此端見通の條と云）開除（本座より開地までの遠程ハ隣しるくいふ）の縮なり

其四ハ（四ハ右にいふ如く盤の竪尚見込の條を云）求程（本座より目的までの遠程をはかっていふ）の縮なり
其五ハ（五ハ右にいふ如く盤の中斜見返の墨を云）假借（開地より目的までの遠程をはかっていふ）の縮なり
以上ハ盤面にしるしてある形を記す以下ハ渾發のしるしき作法を述ぶる扨渾發をもって其遠程をはかるを知べき作法ハまづ渾發乃口を開きて開除の縮口の三をはかり合。其三を量る矩（矩とハ渾発の用ゆる口とかいふ下是つなぐ）をもって求程の縮口の四を量る。然るときハ即求る所の遠程或ハ幾十町或ハ幾十間と。其數量立どころに知らるなり。但し開除の間數十間ある時ハ。盤面に現はるる三の口寸ハ十間の縮なれば口寸なる故に渾發の口をもって彼三乃口寸を一変に変え。是を十間の矩と名き除る（渾発をもって三の口寸を変えとる事一変つゝ除るべし。是を二変にするときハ五間の矩と名を是を五変にするときハ二間の矩と定むべし。余ハ倣之）其十間と名付る渾發の矩をもって。即四の口寸ばかりなる。四の口寸ハ求程の遠程ばかり縮まれる口寸

渾發用法之圖

今此渾発ノ開タル口ハ開除十間ノ縮ノ三〼ヲ変ミタル矩也此渾発ノ口ヲ以テ求程ノ縮ノ四〇ヲ量ルニ三変三有リ三変ハ即三十間ナリ是求程ノ間数也余皆是ニ准シテ知ルヘシ

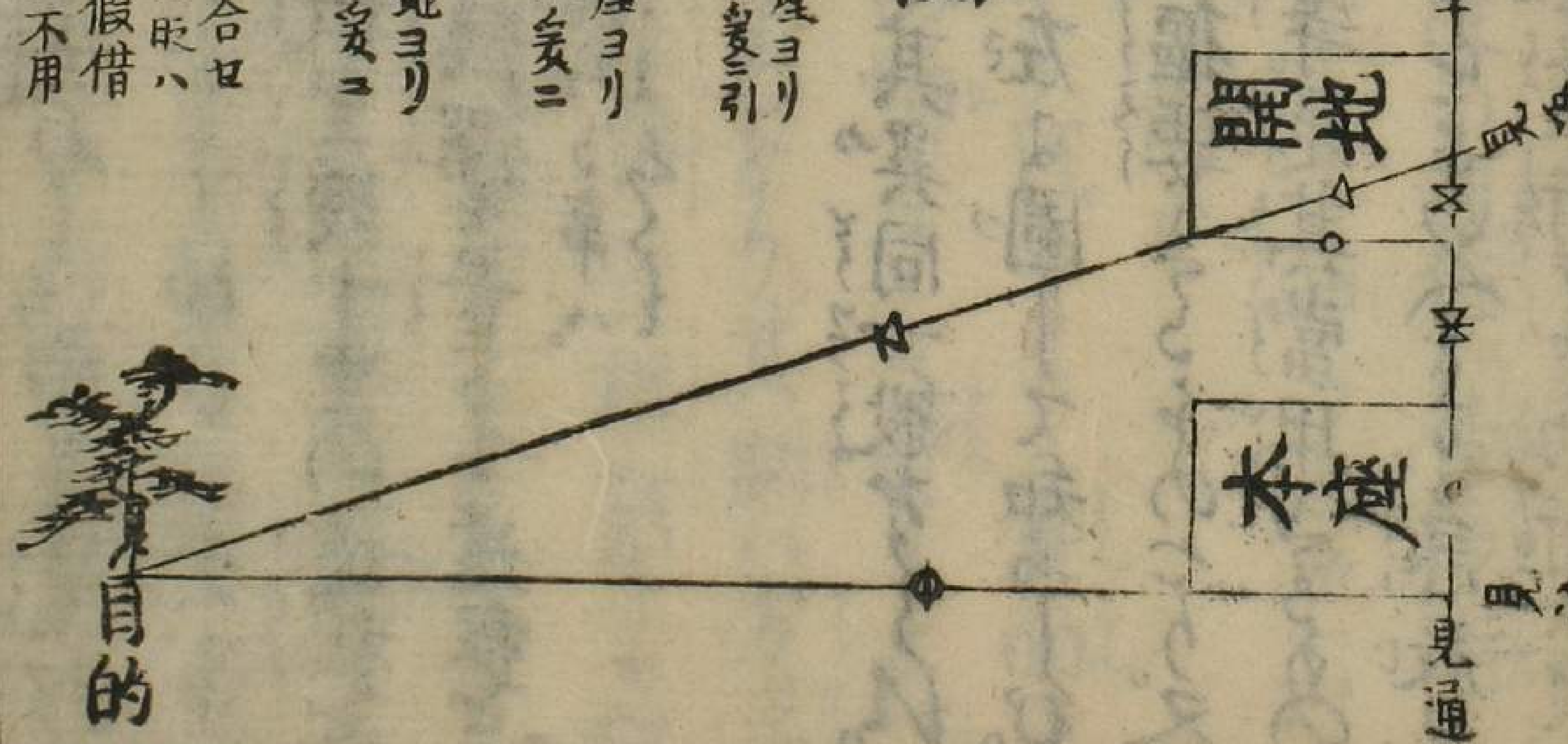


此盤ノ図ハ下ニ図スル所ニ同シ今唯七変ニ図シテ以テ渾発ノ用法ヲ明スナリ

量盤用法之圖

〼此遠程ヲ〼ニ摸ス也
⊖此遠程ヲ〇ニ摸ス也
△此遠程ヲ△ニ摸ス也
毎術如此地形ノ大ヲ以盤面ノ小ニ引縮摸ス也

〼此口ヲ開除ノ縮ト云是本座ヨリ開地マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ
〇此口ヲ求程ノ縮ト云是本座ヨリ目的マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ
△此口ヲ假借ノ縮ト云是開地ヨリ目的マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ
毎術〼此口ヲ渾発ニテ量リ合セ其渾発ノ口ニテ〇此口ヲ量ル時ハ遠程立所ニ知ル丶也△此口ハ假借トテ假物ナリ故ニ大成ノ後ハ不用



なる故に。渾發の矩のごとく此四の口寸三二夾あらバ。即其遠程
三十間なり。四夾あらバ。其遠程四十間なり。さるゆゑ二夾半
あらバ。其遠程二十五間なり。すべて幾數里幾十里の遠程を
量るも其理ハ一なり。されバ高低廣狹淺深を量るも遠程を
量る法に異なる事なし　すこしく異傳ある事ハ。往々其術の下にしるす

量盤術器械品々の事

量盤術の器械古制新作大小精粗すべて其異同一般ならず。
今其無益の品を除き。有用の物のみを採て。左に圖して知らしむ。
所謂量盤定規渾發の三器ハ。就中其樞要なるものなり。又
釣玉垂針箆筆覽鏡標木間繩間竿等。是其當用するもの
なり。其外學者の辨知すべき品物少からずといへども急務
ならざれバとりて後卷に記す。又盤針術渾發術竹竿動術なれ

器物にいたりてハ。皆其編の卷首に圖し。異同古新の差別
いかなるものハ。或問の編に論ぜり。然る中に分度の規矩ハ。量地術の
神器大寶なるが故に。はじめ初學の士をして知らしめん
為に量盤術にいづるといへども下に小圖をと

【量盤】量盤ハ遠近廣狹高低淺深のかぎりをはかるものにて盤面に
引廠定あるに知る器にして。即當術の歸とする所なれバ。
其要器なる事今更述るに不及ところなり。其制ハ方正
平直なるを本とし。盤ハ檜なりてしそ。其臺柱竿ホハ樫なるを用
ゆ。大躰其大きなるものハ。竪長一尺四寸。横巾一尺ばかり。
其小なるものハ。竪長一尺。横巾七寸ばかり。高程ハ何れも
一尺四五寸を節とす。其余の制作ハ恰好よろしきに應
ずべし。尤大小ハ好むところに隨ふべしといへども願くハ

大なるに志て事あり。猶審なる事ハ。下に圖して之を附く
示すを見るべし

定規　定規ハ盤面に載せて。見込見通再見見返の摸範と
すされ器なり。其制ハ檜又ハ樫をもつくる。長一尺八寸余横巾
一寸弱厚三分。是其大畧なり。猶量盤の大小によりて
長短心得有べし。其器尤正直に制すべき事いふに不及
又不時の需に應ずる為に。斥方に曲尺の星をとりつも
あるがよしと云

渾發　渾發ハ盤面に現れてある圖形を。是をもつて量り。遠近
廣狹高低淺深を紀しを器なり。或ハまるき規に用ひ。矩に用ひ。錐に
分割に用ひ。界引に用ひ。
用ひ。假量地等にもちゆ也　此器紅毛國より来るをもつて上品とす。其制
黄銅をもつて作る。又鐵をもつて制するもよし。彼も得失

あり此も得失あり。強く拘泥する事なく。こゝろに任せ
造るべし。長五寸余。其形扇子の上骨二本合せたるに似
あり。下を太くし鋒を細くして。下の方八分ばかり去て要
を施し。要の跪を固くすべし。又鋒の内頬に墨溝を設く
るし。又外頬に曲尺の星をとり付るもよし

釣玉　釣玉ハ盤面の平正を定る器なり其制針に糸を施し
鉛玉の錘をつけ。盤の四隅に降るなり。此糸の曲直をもつて盤の平正を定るなり
糸針ハ尋常に用る品をもちゆ。鉛玉ハ稱目三四文目
ばかりなる銃丸のごとき制を用ゆ

垂針　垂針ハ盤面の平正を極むる器なり。其制黄銅をもつて
作る。恰好惣体下に圖するがごとし。形天秤に用る所の
針口といへるに似たり。其理もまた是にひとし。制作の

大小精粗其望に任すべし。あるひ異作を好むもあり。其理なきかたは會得せざれば用るに害あるべし

【恣筆】恣筆ハ盤面なく定規に随ひ墨を引器なり。竹をもて作る。平生に工匠木容のものを用るところの器物にひとしき故に敢て贅言を不記

【間繩】間繩ハ間町寸尺を定る具なり。長六十間たるを太鍼管のごときを吉とす。上品の麻苧をもって作る。大躰微索の連綿なるがごとく、固く縒りて三繰なるべし。或ハ蠟を引滋を引て染るもよし。水に濡て屈伸なきやうにせんが為なり。其一間毎に印を付置て急用に便すべし。ことに遠程一町に及て引渡事のあるときは、いかにも裏むものなり。兼て其心得有べし。又無用の時藏め置に

には簡篗に捲て置るがよしと云

【間竿】間竿ハ間町寸尺を定る具なり。其制檜又ハ欅をもって長九尺方二寸と三尺づつに継て胴金を入べし。枚に寸尺の星をうち付るがよし。竿方三尺也。其厚の半分を削去て間尺を付る時に竿二本を組ちがへて継やうにすべし。又或制おほし。試てのち其よろしきに應ずべし

【標木】標木ハ間印とも云 見通の印 残印とも云 本座の印 種印係印等に用る具なり。竹木をもて制す。長二三尺徑二寸内外其大躰なり。尤長短大小其時の宜しきに随ふべし。兼て貯置て其具とすべし。期に臨て作るべし。但間除一町以上の印には標木の頭に紙をくくり帛の類を目あてとする物を結付

應じ不然ハ物ごとかに見分がたくして。誤まる事あり。一町よるへからざる所除きしか別に目印を付おくに及ぶべし或ハ又州郡の地圖などを勤る時に用れ印ハ此制にあれバなり。彼制作。盤針術編中に委し

蹙鏡 蹙鏡ハ眼勢の不及ところをたすけて。遠里遠町の目的を明らかに見定る器なり。其制紅毛國の作物を佳とす。其上品なるものは數十里をてらし。其中品なるハ數里をてらし。其次品なるハ數十町をてらし。其下品なるものハ數町をてらすも其㝡上乃品といへくハ。求るに得安からし。然れども上制ならざれども數里までをてらし見る物をハ求めて携へし。此器の制作吾邦尋常の工人の能する所にあらざれバなり。爰に其作用を淺さし名工にあらバ是を制せバ。永く倭朝の重寶ならん

規矩 分度の規矩ハ。地理の遠近廣狹疏密方角をはかりてのち。其圖を紙上に摸を器ふして。規矩兼備の要物也

或ハ是を條貫に用ひ。或ハ是を曲尺に用ゆ。故に規矩兼備の要物といふ。其外かくのごとく機轉をもつて。代りとして用べき事甚だ多し

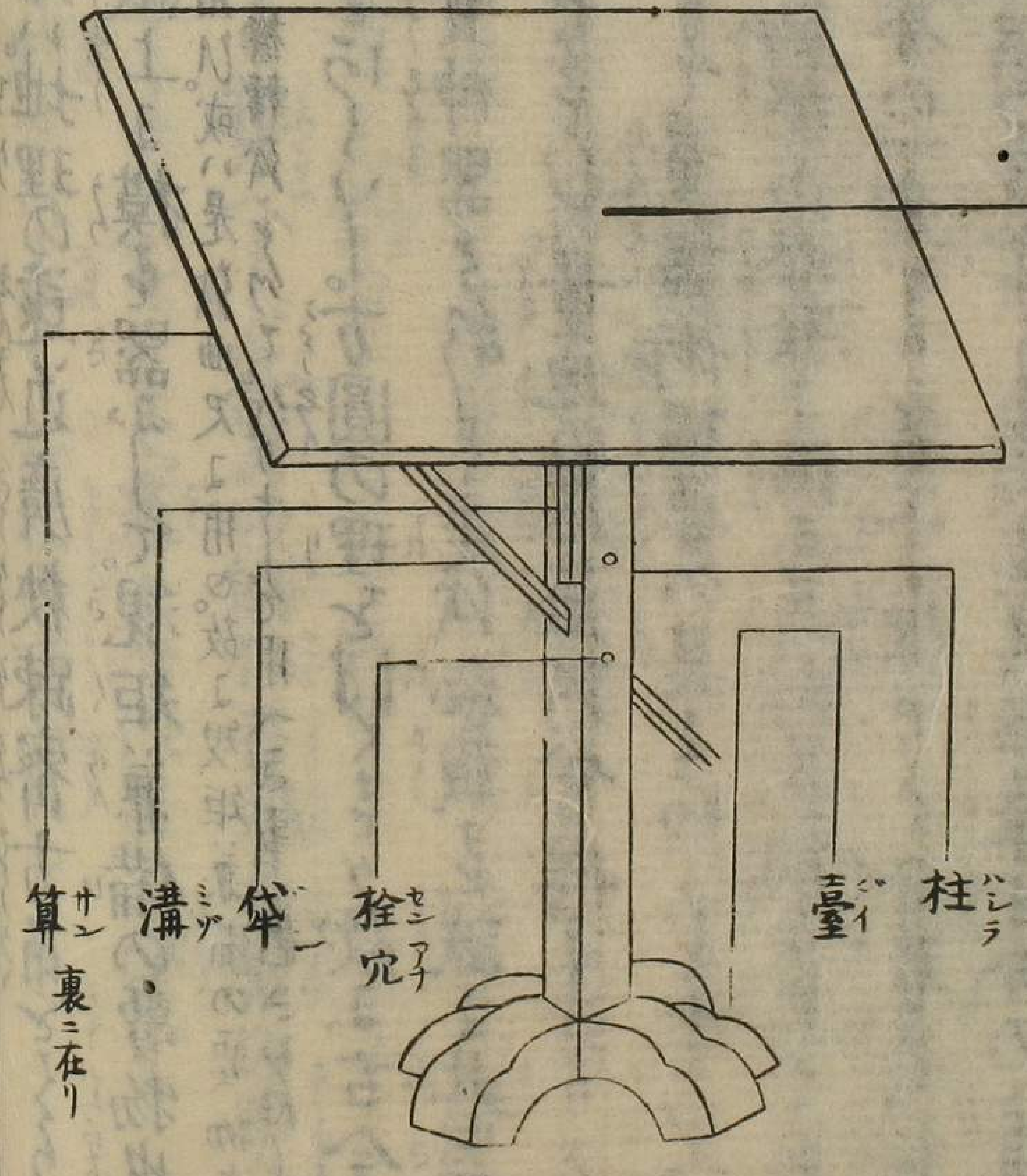
凡此器規矩の妙をつくし。方圓の理をはかるものゆゑに。古今の量地者家。大寶神器となして是を秘藏す。誠に此器乃要用に識達せざれバ量地の底蘊を會得しがたしといふべし。爰をもつて量盤術樞要の具にくはへしも是を以て下に圖して初學の參攷に備ふ。其制黄銅をもつて徑一尺の周圓。十二分の一分なり。名工に課せて分釐毫髮あらそも。其制差誤らざるやうにすべし。其形象寸分の審なる事圖を按して知るべし

盤(バン)
竪一尺四寸
横一尺
厚サ五分弱
両端端込ヲ施ス

算(サン)
長七寸五分
巾四分強
高五分強
両端栓穴ヲ施ス

柱(ハシラ)
長一尺二寸
太方一寸
臺入枘 長一寸 太方七分強
箕請溝五分強
箕立溝三分強
傘入穴 長一寸余 巾四分

量盤表之圖



三所栓穴ヲ施ス

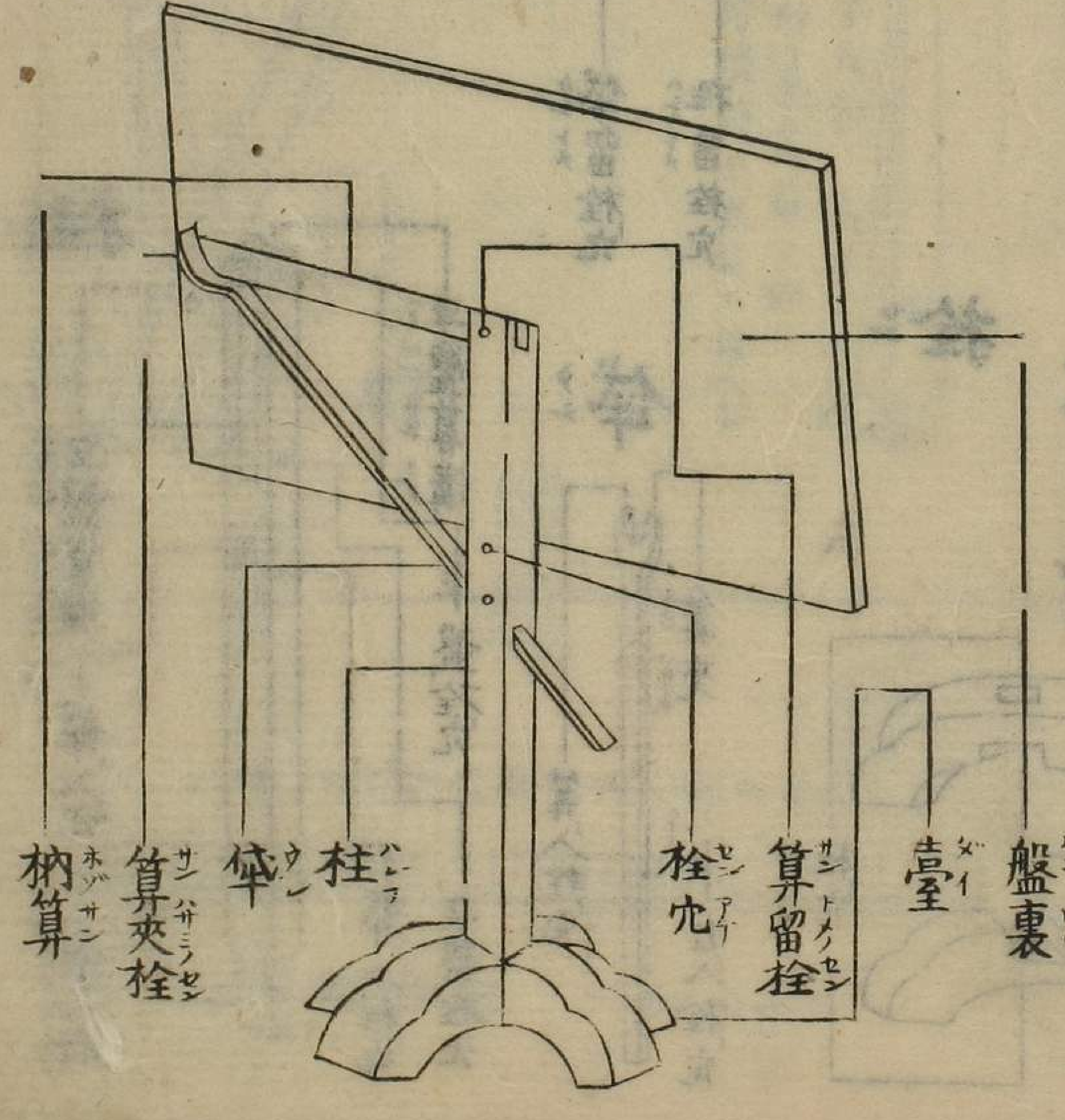
傘(ウレ)
長一尺四寸
太方四分強
算夾 長一寸三分 巾九分
算請 長六分 巾四分
両所栓穴ヲ施ス

臺(ダイ)
蛛手
長七寸
巾一寸四分
枘穴方八分 深一寸

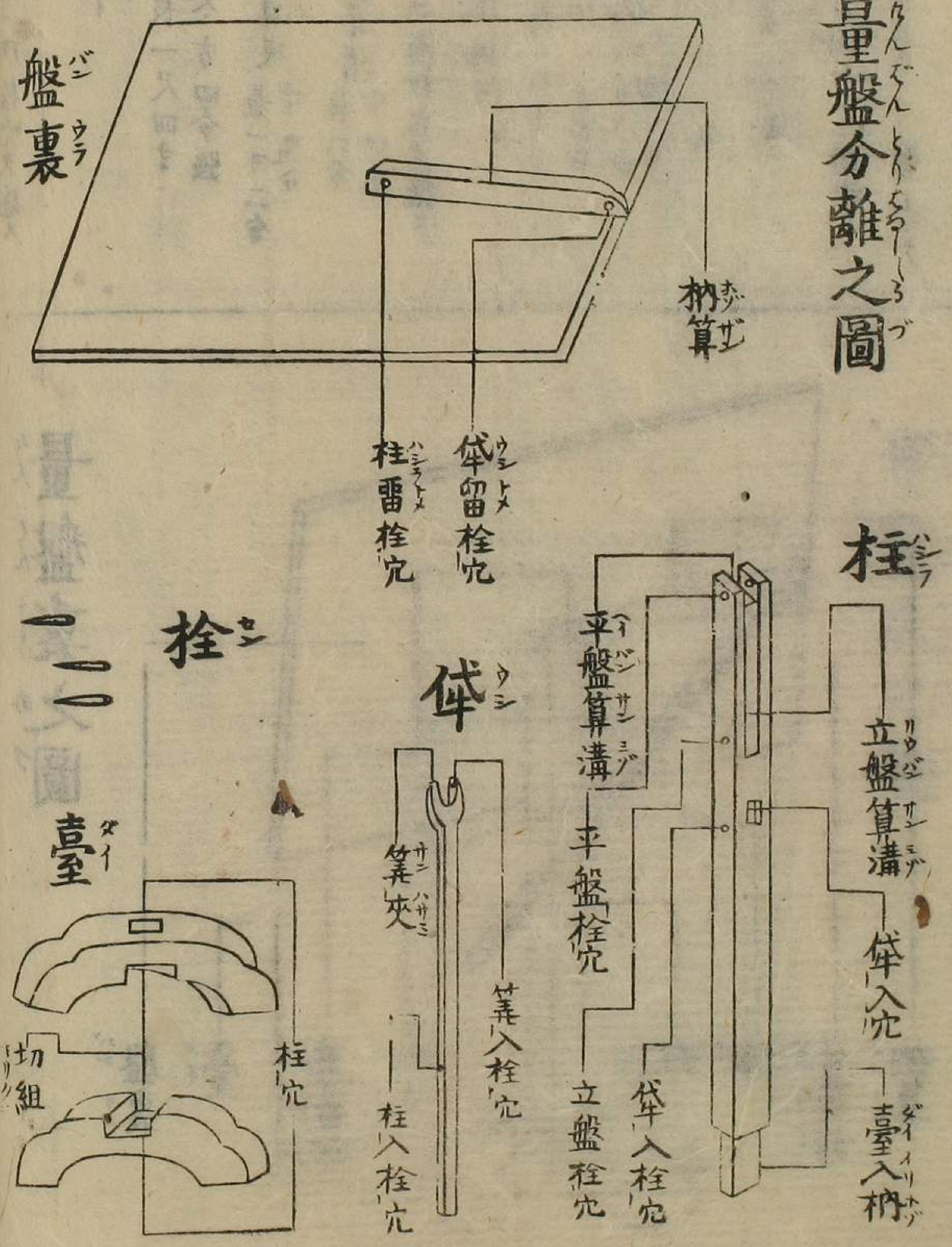
栓(セン)
長一寸余

總高(ソウタカサ)一尺四寸
但臺下ヨリ盤上マデ

量盤裏之圖



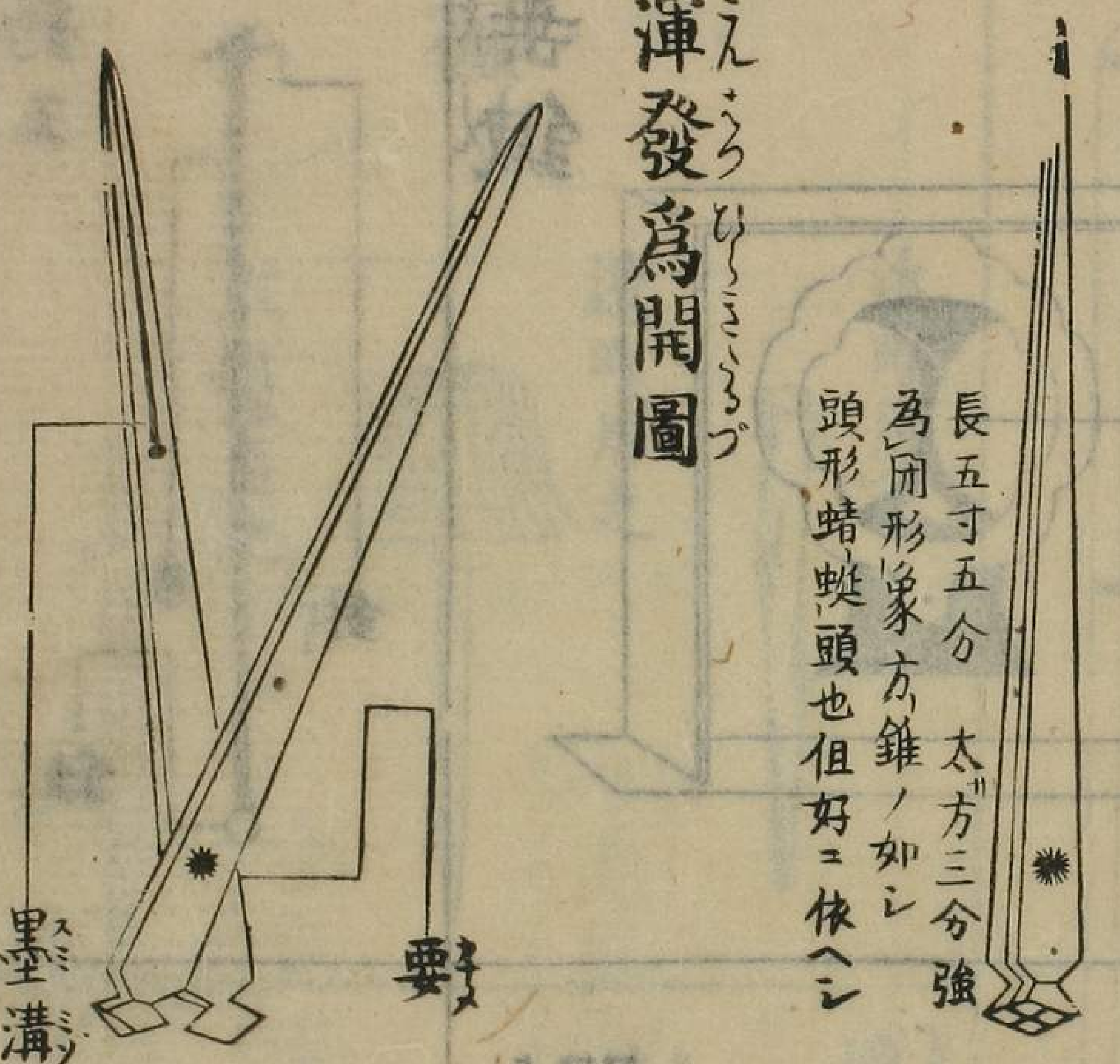
量盤分離之圖



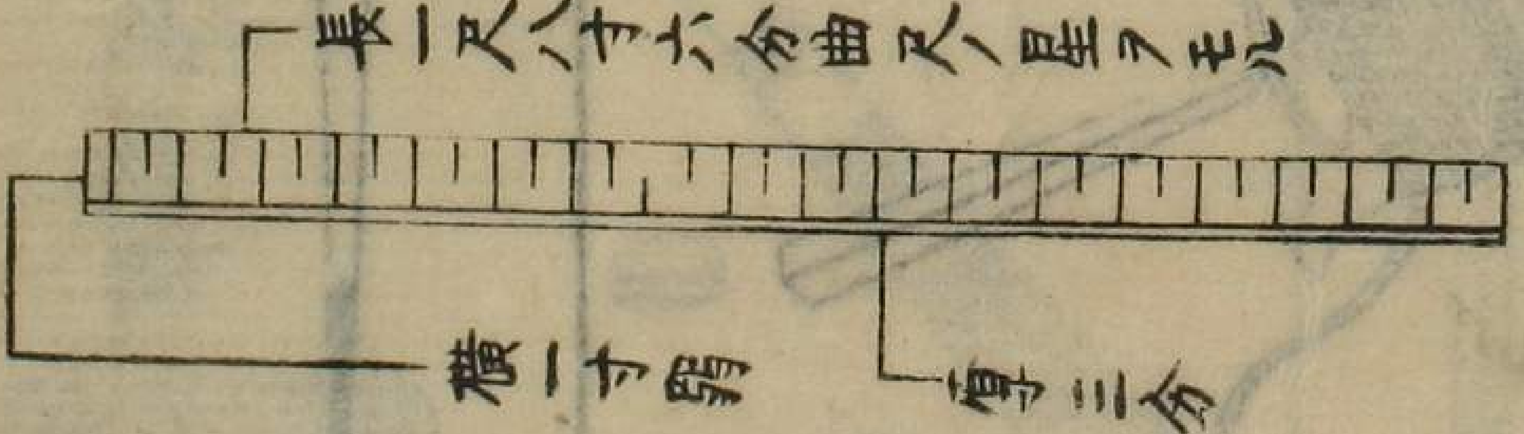
渾發爲開圖

長五寸五分　太方三分強
爲開形象方錐ノ如シ
頭形蜻蜓頭也但好ニ依ヘシ

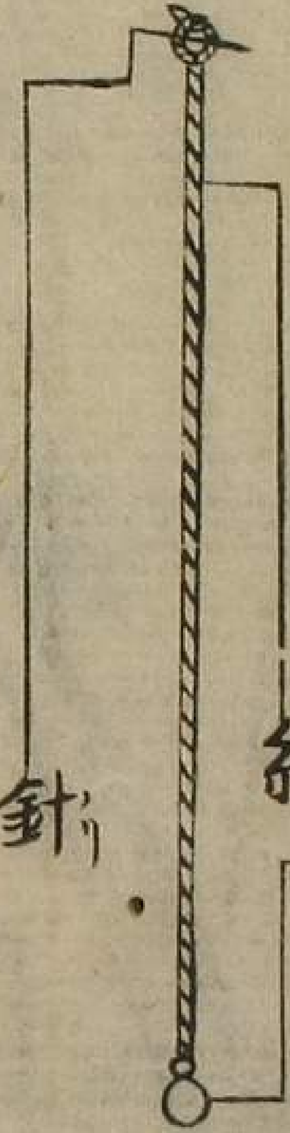
渾發爲開圖



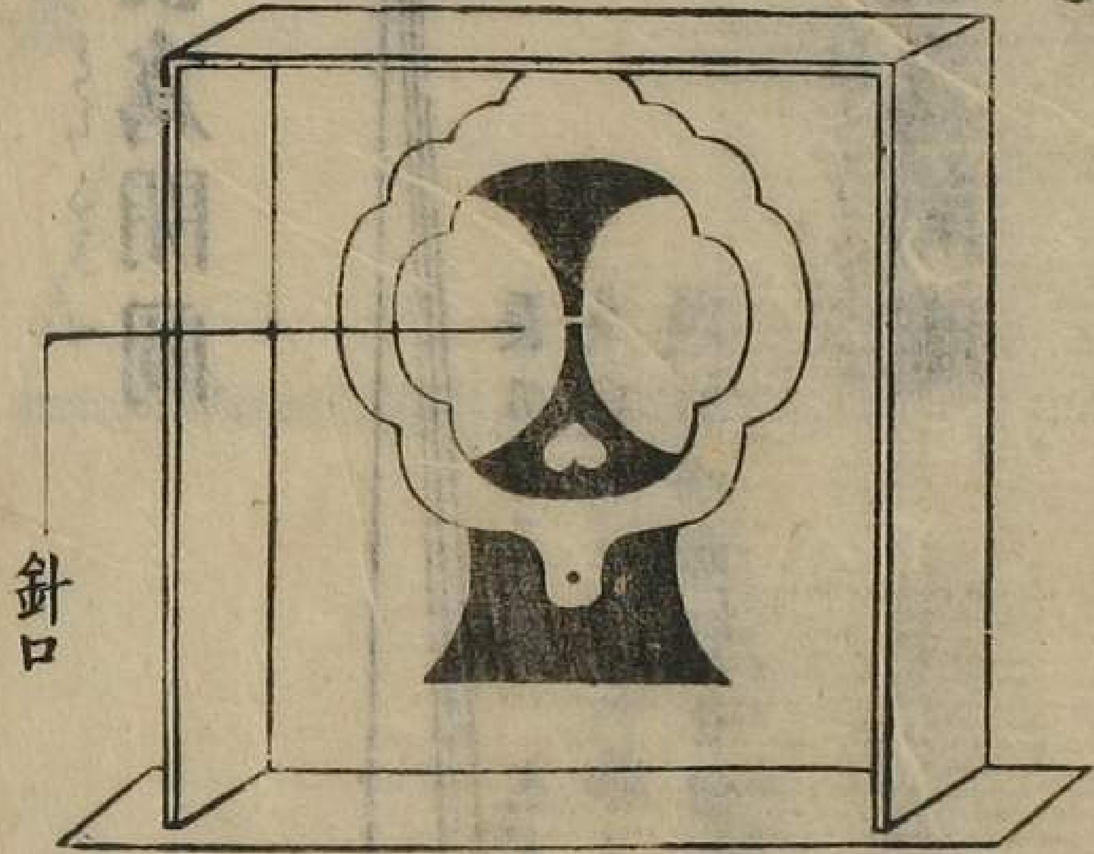
定規



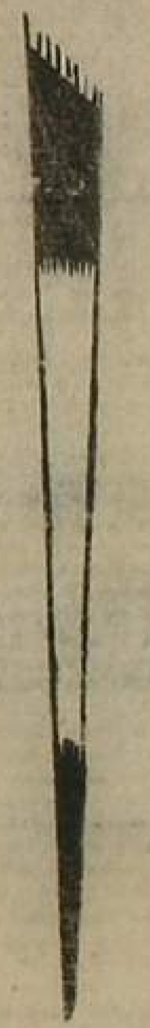
釣玉



垂鍼

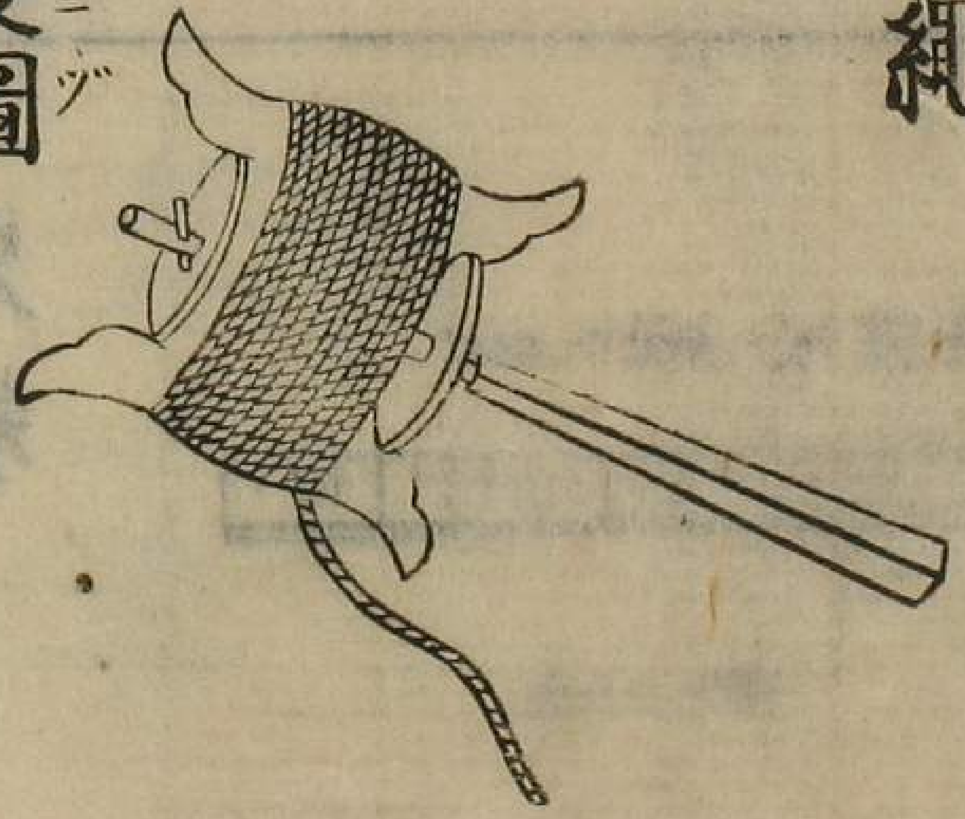


筂筆



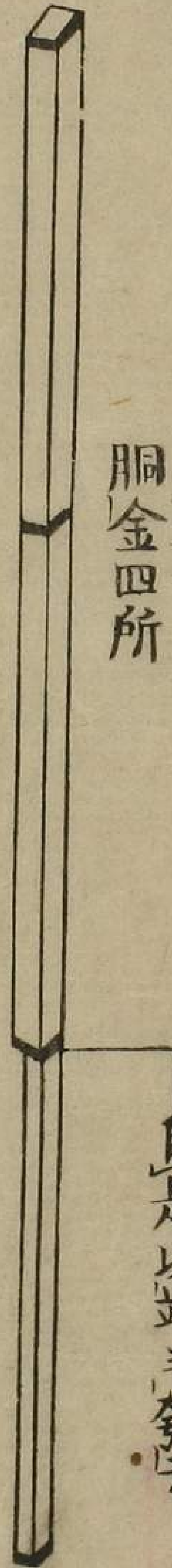
間縄

捲篗圖



間竿

長九尺
方二寸
胴金四所



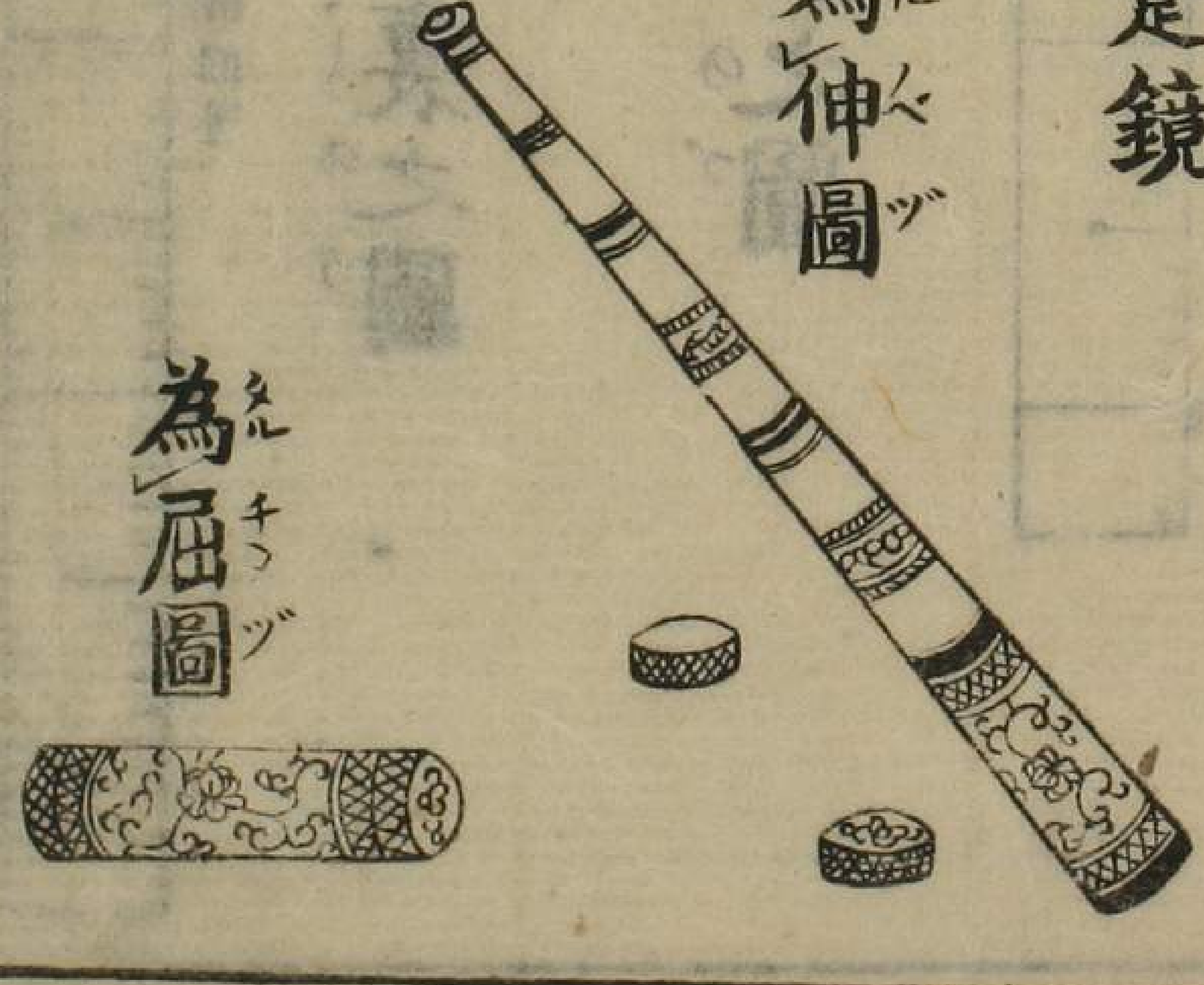
自是以端半劉去

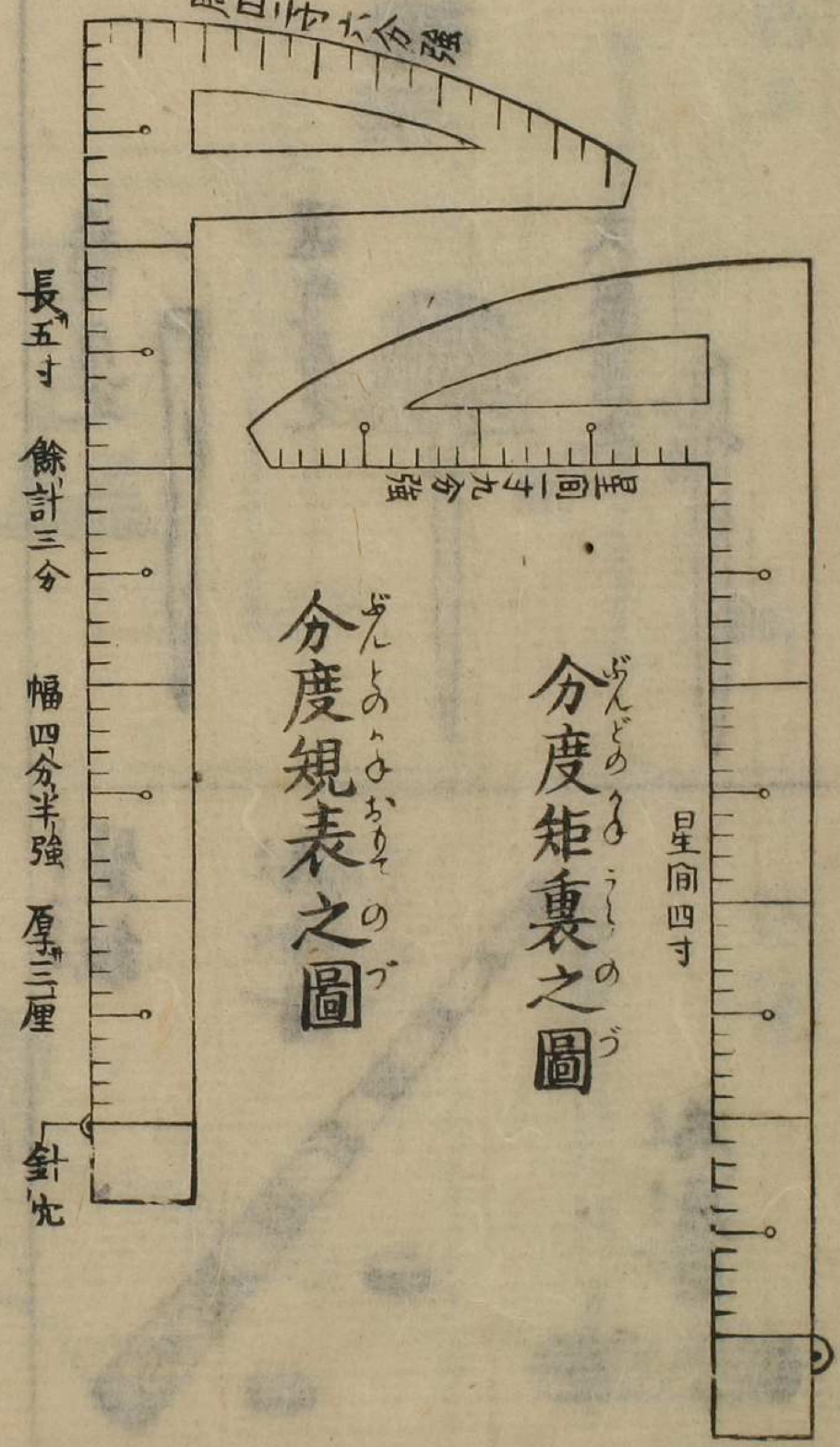
標榝

大盤用之
遠町用之
近町用之

覷鏡

為伸圖
為屈圖





分度矩裏之圖

分度規表之圖

量地指南巻之一終

中山文庫藏書之印